

日本健康心理学会メールマガジン No.49



2016年8月22日 第49号

Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 第6回アジア健康心理学会議(ACHP2016)の報告 ACHP2016大会長 野口京子
- 3) 健康心理学コラムvol.44 桜美林大学大学院 長田久雄先生

1) 学会からのお知らせ <http://jahp.wdc-jp.com/>

■「保健医療・福祉領域で働く心理職のための法律と倫理」が発刊されました(記念出版委員会より)
学会企画「保健と健康の心理学 標準テキスト」の第1弾「心理職のための法律と倫理」がナカニシヤ出版より刊行されました。
さまざまな領域で、ますます活躍することが期待される心理職に必要と思われる貴重な情報が網羅されています。
詳しくは <http://www.nakanishiya.co.jp/book/b243466.html>

■日本健康心理学会第29回大会(岡山)
大会ホームページ「いざ!岡山へ!!-岡山大会の魅力-」内において、以下の内容が更新されました。
・大会宿泊のご案内について
・大会準備委員会企画のご紹介
・懇親会企画のご紹介/うらじゃ踊り
・今後の予定の情報
・岡山の定番グルメ(1)/デミカツ・えびめし
・岡山の定番グルメ(2)/岡山ばらざし
第29回大会URL: <http://jahp.wdc-jp.com/conf/29th/>

2) 第6回アジア健康心理学会議 (ACHP2016)の報告 ACHP2016大会長 野口京子 「(写真添付:「ACHPでのスペシャル・シンポジウムのコマ」)」

ACHP2016は、参加国が30カ国以上、参加者が総勢440名を超えました。
このようにACHP2016が大成功をおさめることができたのは、直前までご苦労いただいた準備委員会の総力、そして当日ご協力頂いた会員およびボランティアの方々のご活躍、そして、その後に続いたICP2016と連動させてパシフィコ横浜で実施できたことによるでしょう。

内容も充実したものとなりました。
“Health Research & Practice from Asia”のテーマのもとに、キーノートはオーストラリアのDr.Donovanにメンタルヘルス疾患・問題の予防を目的としたメンタルヘルス・プロモーション・キャンペーンの開発段階から実践、評価について、米国のDr.Stantonには、癌など慢性疾患の患者に対する健康心理学的アプローチについて、その理論と実践および実証に基づく研究の方法を解説頂きました。
当初からの参加国であるアジアの諸国から、それぞれの国の健康問題の理論と実践について、Dr.Weng(台湾)、Dr.Choi(韓国)、Dr.Han(中国)に、そして日本から田中共子先生にご登壇いただきました。

また、特別シンポジウムにお招きした欧米のゲスト、Dr.Schwarzer(ドイツ)、Dr.Hobfoll(米国)、Dr.Greenlass(カナダ)からは、プログラムの多様性と高い組織力について、そして、アジア健康心理学会(ASHP)がAPAの健康心理学部門およびヨーロッパ健康心理学会



と並ぶ拠点になったという大きな評価を頂きました。
2000年のASHP設立当初から見守っていただいた彼らからこのような評価を得たことは、なにより嬉しくまさに本会議の目的を達することができたと言えるでしょう。
さらに、Dr.DonovanおよびDr.Stanton、Dr.Daceyにお願いしたワークショップ、学会企画や公募の11会場の多様なシンポジウムと口頭発表、155演題のポスター発表などに加えて、本格的な茶道実演、空手演武、テーブル・マジックなども楽しみ、参加者も満足されたことと思います。

多くの方々に協力いただいたACHP2016ですが、参加者の中には、学会の未来を担う若手研究者や院生の姿も多くみられ、この内容を将来に活かすことは私たちの責務と心得ています。
ビジネスミーティングには新しくインドネシア、マレーシア、カタールの代表も参加し、日本健康心理学会が、アジアの健康心理学研究を先導する役割が期待されていることを強く感じたACHP2016でした。

3) 健康心理学コラムvol.44 「超高齢社会で健康心理学のapproachに期待されること」 (桜美林大学大学院 老年学研究科 長田久雄)

高齢社会には長寿社会という側面もある。
多くの人が長寿を享受できるようになったことは喜ばしい。
しかし、単に長く生きられることだけが人生の目的ではないであろう月並みではあるが、健康で経済的に不自由がなく、幸福感や満足感が高いことが高齢者にとって望ましい生き方であることは、これまでの多くの研究から示されている。
この中で、健康と幸福感・満足感は健康心理学に関連の深い側面である。
老化と疾病は異なる現象であるが、密接な関連もあり、高齢になると罹患率が高まることは明らかである。
また、老化そのものの完全な防止は不可能であり、老化と結びつきの深い疾病も多い。
こうしたことを前提として高齢者の健康について考えるとすれば、疾病が皆無な状態を目指すことは、理想的ではあったとしても現実的ではないかもしれない。
そのような場合に高齢者の健康はどのように捉えたらよいであろうか
日常生活を自立・自律して送ることができる状態を機能的健康と呼ぶことがある。
疾病の有無よりもむしろ、とくに高齢者においては、機能的健康の高いことが、幸福感・満足感と密接に関連するとの指摘がある。
もとより、疾病の予防と治療は重要であり不可欠であるが、日常生活の自立と、それに基づいて、自分自身で目的を持ち、それを達成してゆくというような自律した生活の維持を支援するという視点も、高齢者に対する健康心理学的approachに考慮されることが期待される。

日本健康心理学会広報委員会
<http://jahp-public.blogspot.jp/>

メールマガジンの配信停止、アドレス変更については下記アドレスまで。日本健康心理学会事務局 <jahp-post@bunken.co.jp>

メールマガジンへのご意見・ご感想については下記アドレスまで。広報委員会 <jahp-ML@bunken.co.jp>

過去のメールマガジンは、こちらからご覧いただけます
<http://jahp.wdc-jp.com/health/health1.html>